熊本学園大学 外国語学部 第05号
英米学科 GAZETTE
平成29年5月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

Xiは何と読むか？

外国語学部教授　英米学科長　神本　忠光

先日、英字新聞を読む授業で "Abe-Xi talks likely in July" という見出しが出てきた。"Abe" は「安倍首相」だとわかるが、たいていの学生は "Xi" でつまずく。"XI" の印刷間違いではないかと、機転を利かしたつもりの学生も一人や二人は出てくる。インドの TV ニュース・キャスターが "Eleven Jingping" と読んで首にされた話を紹介する。

「習近平」と漢字で書けば、わからない学生はいない。最近の邦字新聞は、「シージンピン」とルビを補っている。しかし TV などのマスコミでは、相変わらずほとんど「シュウキンペイ」が使われている。

日本では固有名詞の読み方は基本的に現地語読みを採用している。従って、Caesar は「カエサル」だし、Paris は「パリ」である。しかし日本の場合、国際化を標榜しながらも、漢字があると日本語式がまかり通る。理由はあるが、話し始めれば授業は進まない。

毛沢東、胡錦濤など、日本語式なら難なく読めるだろうが、果たして現地語読みではどうだろうか。「国際化」は現在だけでなく、過去にも遡る必要がある。

英米学科の最新ニュース

★３月に卒業した学生のうち５名が英検準１級を取得し、外国語学部長賞を与えられた。

★第11回英語教育研究会が開催された。叶貞夫先生（熊本市教育委員会指導課）に講演を依頼した。また、英米学科卒の現職の中学・高校教師や教職に関心を持つ学生など約20名が参加し、新指導要領についても話し合った。

★４月初旬には新一年生のためのオリエンテーションが西合志研修所で一泊二日で行われた。卒業生や留学生も参加し懇親を深めた。

研究紹介

Cross-Culture Kids in Japan

外国語学部　英米学科　講師　Christie Provenzano

As Japan becomes increasingly globalized, society is starting to make room for permanent foreign residents settling here to live, work and raise their families. Non-Japanese who marry and raise children with Japanese partners experience unique challenges raising their Cross-Culture Kids (CCKs) (Pollock and Van Reken, 2009). In Japan, which is largely monolingual and monocultural, it is no surprise that some of those challenges are related to the fostering of bilingualism and biculturalism in their children. In families where neither parent is Japanese, raising Third Culture Kids (TCKs – children raised in a culture different from their passport culture) brings up similar language, culture and identity issues. *Kikokushijo* (帰国子女, Japanese returnees), although often studied as a unique and separate group (for example: Kanno, 2004), can generally be classified as TCKs.

It is widely recognized that CCKs, including TCKs and *kikokushijo*, enjoy a number of benefits from their unique circumstances. Many (but not all) develop bi- or multilingualism, which positions them well for acceptance to desirable high schools and universities, and later, for excellent work situations. Research shows that bilinguals also enjoy some less obvious benefits compared to their monolingual counterparts. These include more focused concentration and keener analytical skills, both of which to tasks in a variety of disciplines, not just language (for a general overview, see Bhattacharjee, 2012). Also, due to their deep understanding of multiple cultures, CCKs often have a broader worldview that makes them more adaptable and flexible.

Japan-based researchers in this field are working to effect change in educational policy and public opinion. Dispelling myths about bilingualism (such as the idea that it is rare to be bilingual) is one step towards normalizing it and bringing into the mainstream. As Japan opens its doors wider and wider to foreign residents, it can only benefit from the linguistic and cultural diversity that future generations will bring.

For references, please contact Christie@kumagaku.ac.jp

学者への道程

外国語学部英米学科教授　吉田　良夫

小学生の３～４年の頃であったか、確かNHKの番組で『トムソーヤーの冒険』を連続ものでやっていた。テレビもまだ懐かしい白黒の小さい画面の頃の話である。

番組の中では、アメリカ南部のやんちゃ少年トムが毎回面白い、滑稽な冒険を繰り広げていた。異国に対する興味とあいまって、私の冒険心をひどく刺激した。とにかく面白くて、夢中になった。

ある日同名の本を見つけて、読んでみると抜群に面白かった。その番組に原作があることを初めて知った。本は、テレビよりはるかに面白かった。大げさに言えば、それが私の文学との出会いである。

どんなふうに面白かったかといえば、テレビでは画面で見るわけだから、それ以上の想像力は必要としない。一方、本は文字で読み、それを視覚化しなければならない。想像力で補いながら読むわけである。画面は限定的だが、想像力は無限である。

その後、図書館の本だけでは物足りなくなって、父親に本を買ってくれるようにねだった。父は、えらく喜んで町中の本屋を回って色々と買ってくれた。『巌窟王』『ああ無情』『ロビンソン・クルーソー漂流記』『アルプスの少女ハイジ』『バンビ―』『小公女』など、当時少年少女文学全集として出ていたものは次から次へと読んだ。なぜか外国文学が好きだった。私の読書の習慣はあの小学生の頃にできたといっても過言ではない。

その後、文学好きで英語が多少できた高校生が英文学の世界へ憧れ、進んでいったのはある意味自然な流れであった。

図書紹介

『多文化共生のための異文化コミュニケーション』
原沢伊都夫（著）

外国語学部英米学科教授　佐藤　勇治

日本の内外で外国人と一緒に生活したり、働いたりする機会が増えている中で、「多文化共生社会」の実現に向けた努力が重要とされている。そのためには、異文化理解とそれに基づく異文化コミュニケーションの知識と実践が必要となるが、本書はこのテーマについてわかりやすく、身近な話題を提供しながら説明している。

日本で提供されてきたこれまでの類書は、主としてアメリカの大学院で教育を受けた異文化コミュニケーションを専門に研究する人たちの手によるものであったが、本書は日本語教育を専門とする著者が、多文化共生社会の実現のために必須となる異文化コミュニケーションのエッセンスを伝えようとしたものである。

異文化コミュニケーションを単なる日本人と外国人間のものとせず、同じ日本人どうしでも性別や年齢の違いなど、あらゆる側面で生じるものと、その対象を最大限広く捉えている点や、「男と女のラブゲーム」など刺激的な言葉で読者の関心を引いたり、クイズを織り込んで楽しみながら学ぶ仕掛けをしたりと様々な工夫が見られる。誰でも気軽に多文化共生を考える契機となる本である。

（明石書店、2014年、2,700円＋税）

学会・調査・出版等報告

International Conference Report

外国語学部　英米学科　講師　Christie Provenzano

From March 22 to 24, 2017, I presented a workshop about designing combined-skill activities at a Seminar on English Language Teaching titled “From theory to implementation: Bringing new ideas into your classroom”. It was held by Hue University’s College of Foreign Languages (HUCFL) in Hue, Vietnam, and the Japan Association for Language Teaching’s “Teachers Helping Teachers” (THT) special interest group. The seminar brought Japan-based English teaching specialists to Vietnam to conduct guest lectures in HUCFL classes and workshops for Vietnam-based English teachers from all educational levels.

Local organizers and participants warmly received the presenters from Japan. The event was clearly a rare chance for local Vietnamese teachers of English to network with international colleagues. I found the HUCFL/THT event to be both rewarding and inspiring.

出版：
セルバンテス『ドン・キホーテ前編』、『ドン・キホーテ後編』
水声社、２月、３月『ドン・キホーテ』の全訳

外国語学部英米学科教授　岡村　一

拙訳はスペイン語からの翻訳としては６番目にあたるが、このたび、日本初となるセルバンテス全集の一部として刊行された（第２巻、第３巻）。

編集後記

３月４月は気ぜわしい。卒業生を送り出したかと思えば、新入生が入ってくる。今年は昨年度の熊本地震も重なり、複雑な思いである。学位記授与式と入学式に参列し、クマガク式典曲のエルガー作曲行進曲「威風堂々」を聴く。英語ではLand of Hope and Gloryと呼ばれている旋律である。卒業生は社会へ、新入生は学問の世界へ、そして熊本は再生へ、それぞれ一歩ずつ前へ進もう。（TK）

編集人　神本　忠光（英米学科長）
〒862-8680
熊本市中央区大江2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）
Mail: kamimoto@kumagaku.ac.jp
きみと未来をつなげる
クマガク